

人間関係の影響力と社会についての一考察

—デュルケム社会学の視点から—

西 敏 郎

A study on the Influence of human relations and society

—From the perspective of Durkheim sociology—

Toshiro NISHI

Abstract

As long as society is made up of human beings, social relations can be said to be human relations. The purpose of this study is to examine the relationship between society and the individual from the perspective of human beings and society (i.e., groups of people).

Keywords : human relations, social relations, Society = a group of people

はじめに（研究の目的）

本研究は人間関係の持つ影響力について一考察を付け加えることを目的としている。人間関係に関する研究はこれまで、心理学、社会学、経済学など様々な学問や側面からアプローチされてきた。そこで今回はその中から社会学によるアプローチを試みる。また社会学と一口に言っても、その分野や範囲は多種多様に渡る。したがって今回は社会学の基礎を築いた1人である、デュルケムの「デュルケム社会学」をベースとしてそのアプローチを試みる。

1. 研究の視点と方法

改めて説明すれば、人の行動や判断の基準は社会からの影響を多分に受けている。しかし社会と一口に言ってもそれは様々であり簡単に定義できるものではない。例えば社会と聞いてまずイメージするのは政治や歴史、経済であったり、家庭だったりする。しかしその中でただ一つ共通する項目がある。それはどの社会も必ず人がいて成立している点であ

る。つまり社会とは人々の集団であり、ここから社会関係とは人間関係と言える。本研究はこの視点から、デュルケム社会学（主として『自殺論』と『社会分業論』）を手掛かりに、社会（人々の集まり）と個人との関係、そしてその関係の影響力の析出に一考察を加えることを目的としている。

デュルケムは数々の著書において、この問題にアプローチしており、彼は「人間関係が持つ影響力とは何なのか」「人間同士を結びつけるその根底にあるものは何なのか」を探求していた。

そこで当時のフランスで社会問題となっていた自殺をその研究対象として掲げ、人間関係の影響力の解明を目指したのが『自殺論』であり、変化する社会の中で人々の結びつきの根底にあるものの解明を目指したのが『社会分業論』なのである。

2. 個人と社会（人々の集団）の関係

自殺の3類型

デュルケムは『自殺論』の中で、自殺と社会の因果関係を整理し、自殺を3つの分類に分けている¹⁾。

- ① 自己本位的自殺…個人の内的な問題が要因で、個人に死を選ばせてしまった自殺であり、個人が社会関係への結びつきを失ってしまった結果起こる自殺。

例：失恋、自信喪失、受験失敗など

例えば、失恋をする。受験に失敗して予定していた学校に入学できなかったとする。それは本来、結ばれる予定であった人間関係を喪失してしまった状態を意味する。デュルケムによれば個人が社会との結びつきを失ったとき、個人は自殺へ誘導されるという。この個人が社会関係から切り離されてしまった状態を彼は「過度の個人化」と呼んだ。

※イメージ（図1）。

- ② 集団本位的自殺…社会が個人をより強力に包括した状態により発生する自殺。個人自身が特に問題を抱えたわけではないが、個人を取り囲む社会（家族や友人、所属組織など）の権威が強大になり、その社会の判断が個人の判断よりも優先されている状態で発生する自殺。

例：特攻隊、一家心中など

個人と社会の関係が密接であればある程、個人の判断は社会に委ねられる。デュルケムはこれを「未発達な個人化」と呼んだ。もし個人が社会との強い結びつきを持っていなければ、個人は社会の意思に従いにくくなるため、この自殺は発生しない。

※イメージ（図2）。

- ③ アノミー的自殺…社会の規制・常識・慣習などが崩壊し、個人が社会との結びつきを強制的に絶たれてしまった状態から発生する自殺。社会の変動により個人を取り巻く環境の変化に個人が適応できず、自ら死を選ぶ。

例：家族、恋人、友人、職場などの喪失

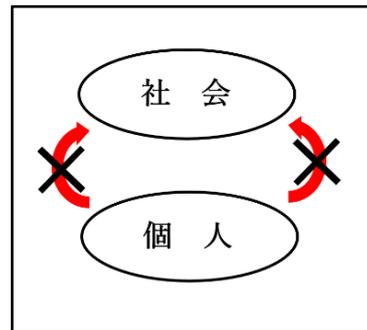
災害や戦争などを例として、個人を取り囲む社会関係が喪失してしまったため発生する自殺で、それは本来結ばれていたはずの社会関係を、社会側から強制的に絶たれ、個人がそのストレスに耐えられずに生じてしまった自殺である。

※イメージ（図3）。

以上3つの自殺を分類するならば「自己本位的自殺」と「アノミー的自殺」は、個人が社会と切り離されたことを原因とする自殺である。（※「自己本位的自殺」は個人が社会へ結びつく力を失い、「アノミー的自殺」は社会が個人を繋ぎとめておく力を失っている状態であり、その力の方向において両者は区別される。）

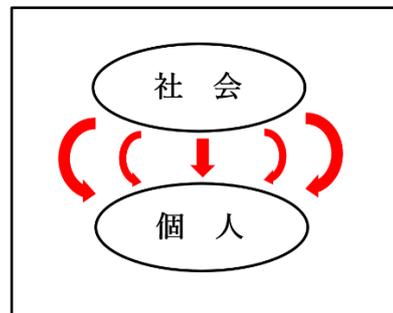
一方、「集団本位的自殺」は個人がより強く社会に帰属していることを原因とする自殺である。

（図1）



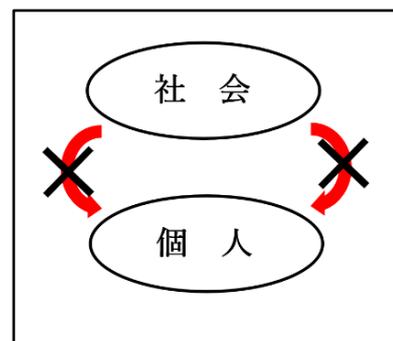
説明：自己本位的自殺は、個人が社会へ結びつく力を失ってしまっている状態。

（図2）



説明：集団本位的自殺は、社会がより強固に個人を結びつけている状態。

（図3）



説明：アノミー的自殺は、社会が個人を繋ぎとめる力を失ってしまっている状態。

3. 個人と社会の関係の比較

エゴイズムとアノミー

例えば、宗教を軸としてこの個人と社会の関係性を見てみる。デュルケムは『自殺論』第2編第2章「自己本位的自殺」の中で、ヨーロッパのキリスト教徒（カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教等）の比較を行っている。結果としてプロテスタントの方がカトリックよりも自殺率が高い値を示した²⁾。デュルケムによればプロテスタンティズムとカトリシズムのもっとも本質的な違いは「自由検討」ということを認めているか否かであるという点に集約される。プロテスタントはカトリックと違って聖書解釈を強制されない。つまり「自由検討」が出てくるのは教会が指導力を弱めた結果に過ぎないという結論である。

ここからプロテスタントがカトリックよりも自殺が多いのはプロテスタント教会の統合がより弱いからということであり、その表層的な部分として「自由検討」があるという理由なのである。さらにデュルケムは家族や政治についても調べることによって「自殺は社会の統合の強さに反比例して増減する³⁾」と主張した。

ここから言える事として、集団の統合が弱まると、個人は集団に依存しなくなり自分自身にのみ依拠するようになる。これがエゴイズムである。自分以外に献身対象がなくなり、個人の自我が過度に肥大している状態、常軌を逸した個人主義のことである。

(ただしこれは、いわゆる利己主義、つまり人の迷惑を顧みず、あくまで自分の利益を追求するということとは意味合いが異なる。)エゴイズムがなぜ自殺の原因になるかを説明するにあたって、デュルケムは、人間は個人を超えた対象に結びついていないことには生きられないという前提を立てている⁴⁾。

集団の統合が弱体化して人々が集団にもはや結びついていないという状態は、人がいつ自分の生命を絶ってもおかしくはないような状態におかれているのと同じであり、そういう状態にすでにさらされているならば、ちょっとした私生活上の出来事でも、人をかすかに社会の結び付けていた絆を容易に

断ち切ってしまう。自殺の原因はあくまでエゴイズムであって私生活上の出来事は偶然的な原因にすぎない⁵⁾。

デュルケムは自殺をこのように説明し、さらに当時の自殺の急増をもたらした原因として、このエゴイズムの他にもう一つアノミーをあげている。統計を見てみると意外にも金融危機といった没落の危機のみならず、万博などのように国が急激に繁栄する歓迎するべき時にも自殺は急増している⁶⁾。この点について、デュルケムは社会が混乱し秩序が動揺している点で両者は同じであると考えた。というのもどちらも変化という点で共通しており、これまでの均衡が破壊されてしまっているという状態において同じということである。ではなぜこの時、自殺が急増するかという問題にあたって、デュルケムは「どんな生物もその欲求が十分に手段と適合していないかぎり幸福ではありえない⁷⁾」という前提を立てる。つまり手段が許す以上のものを求めれば、欲求は絶えず裏切られ、そこには苦痛しかありえない。そして人間は動物と違って欲求は肉体にくくりつけになってはいない。したがって人間の場合、欲求はどんどん外から煽られてしまう。ところが普通の場合には、社会が人間の欲求に何らかの歯止めをかけている。なぜなら人は社会的立場や役割、階級や身分に応じてどこまで望んでいいのか、成長・適応する過程で知らず知らずのうちにわきまえているからである。「分相応」とか「自分の立場で…」といった言葉からも想起できる。そしてそもそも、そういったことを意識すらしていない場合も多い。

しかし社会が混乱におちいった時には、この社会による規制・抑制は失われてしまう。人の欲求のこの無規制状態、これをデュルケムはアノミーと呼んだ。社会が急激に繁栄する時、衰退する時、変化する時は、個人を今まで押さえつけていた社会的役割・社会的規制は外され、個人の思考・行動は無限の方向へ広がっていく。しかし実際の社会においてその欲求のすべてが叶えられる訳でもなく、そこには不満だけが蓄積する。そして、ついには生への意欲も衰えてしまうのである。商工業・資本主義の世界はまさにこのアノミーの慢性状態であり、これが自殺のもう一つの原因となっている。

エゴイズムとは集団の結束の弱体化であり、アノミーとは規範の弱体化である。枠付けを失った個人化はエゴイズムやアノミーとなって表れる。そして先程説明したように、エゴイズムは「個人が社会に結び

つく様式」によって、アノミーは「社会が個人を規制する様式」によって規定されている点で両者は区別される。とはいえ、ともに「社会が個人のなかに十分存在していないという理由から発生したもの⁸⁾」であり、同じ社会的状態の二つの異なった側面に過ぎない。

似通った2つの自殺類型であるが、これは個人化がそうした枠付けをなくしたとき、どのような状況が生じるか。これを全面的に問題にしているのが『自殺論』なのである。

4. 人間関係の基盤について

デュルケムがボルドー大学の最初の講義で取り組んだのが「人々を互いに結び付ける絆は何なのか⁹⁾」という問題であった。社会的連帯(=人々の結びつき)の本質をめぐるこの問いは、『社会分業論』においても展開されている。『社会分業論』の基本テーマは、社会が発展すれば、個人がますます自立的になりつつあるのに、個人はなぜ社会とますます密接になってくのか。そして個人はますます社会に依存するようになるのは一体どうしてなのか。という一見矛盾するように思われる事態の解明であった。

デュルケムによれば、スペンサーは社会的連帯を「個人的利害からひとりで生じた協定」だとし、「契約」という言葉を使って人間関係を説明している。つまりスペンサーにとって社会的連帯とは「個人的利害の自発的な一致に外ならない¹⁰⁾」ということである。確かに利害によっても人々は結びつくけれども、利害ほどつろいやすいものはなく、さらに「契約においては必ずしもあらゆるものが契約的ではない」これは「契約における非契約的要素」という論点からも明らかである。「契約はそれ自体では自足的ではない。社会から生じてくる契約の規制が加えられてはじめて可能¹¹⁾」だからである。

例えば、ある品物をもらうかわりに代金を払うという契約の場合で考えると、品物は受け取ったけれども代金は払わない。あるいは送られてきた代金は受け取ったけれども相手に品物を送らない。自己利益追求の観点からいえばこのように騙すのがいちばん合理的である。というのも自分が正直に出て相手が騙した時は自分の丸損。自分も相手も騙しに出るときは互いに損はなし。自分だけが騙し相手が正直に出たときは自分の丸儲けだからである。したがっ

て、契約がうまくいくためには契約の両当事者は騙したりしないという第2の契約が必要となる。しかし、これについても騙すのがもっとも合理的であるという点では変わりはない。とすれば第2の契約についても、両当事者は騙したりしないという第3の契約が必要となる。そして第3の契約についても…。これはもう無限後退となる。

それゆえ契約が可能であるためには、相手への信頼という非契約的要素が基礎になければならない。近年、セーフティーネット論が注目されているが、そこで掘り起こそうとされている問題もこの論点に他ならない。経済学が前提とする人間像と異なり、市場競争の世界には、信頼や協力の基盤が奥深く埋め込まれており、相互信頼を前提とする「協力の領域」があってはじめて「市場競争の領域」もうまく働くとする考えである。「契約における非契約要素」の議論から明らかなように、社会がもし諸個人の契約に基づいているとすれば、社会は成立不可能になるはずである。

デュルケムは『社会分業論』において、近代から始まる分業はバラバラに独立した諸個人の間で行われるのではなく、分業は「構成されている社会の諸成員のみ、実現されうる¹²⁾」としている。したがって「契約における非契約的要素」の議論から明らかなように、社会がもし諸個人の契約に基づいているとすれば社会関係は成立不可能になるはずである。

これまで“分業”については生産力と労働者の熟練を増大させることによって、社会の知的および物質的發展をもたらすものとしてきた。しかしデュルケムが明らかにしたかったものは分業の別の機能である。それは「2人あるいは数人のあいだに連帯感を創出すること」、「諸機能の連帯がなければ存在しえない社会を可能ならしめること」である。つまり、分業は純粋に経済的な利害のみにかかわるものではなく、デュルケムによれば分業がもたらす経済的貢献は、それがつくりだす道徳的効果にくらべれば取るに足らず、社会の凝集が確保されるのは分業によってなのである。したがってデュルケムの主張は「社会の統合は分業の結果である」ということであり、分業論は連帯論であり、最終的に突き詰めればそれは道徳論なのである。

5. 人間関係の影響力（考察）

以上を踏まえ改めてデュルケムが説明したかったことは「人間関係が持つ影響力とはどんな形で、どんな時に働き、どのような力なのか」ということである。そして最初にとりあげた『自殺論』において、自殺という社会的現象は「個人と社会（人々の集まり）の結びつきの様子を表している」という証明であった。

つまり人は意識せずとも、思考、判断、行動する際には必ずある種の社会的拘束を受けているのである。その拘束とは外在的拘束力（強制作用）である。

（例えば国籍、人種、民族、地域、家族、言語、文化、慣習など）それらは個人が好きのように選択できずに生まれてくるし、今使っているこの言葉も著者が定めたものではない。さらに文化や慣習などは意識する以前にすでに受け入れているし、そこに私たちは価値と規範を見出している。これらは個人の外（＝社会）に確実に存在し、それぞれの個人は意識しなくとも外在的拘束力により社会的地位や社会的役割が与えられている。そしてそこには偏見や差別も伴っている。

デュルケムによればこの社会の外在的拘束力から個人が疎遠したときに自殺は起きるというのである。ではなぜ社会の外在的拘束力から個人が離れてしまうと人は生から訣別してしまうのであろうか。例えば、家族、会社、学校、サークルなど世の中にはありとあらゆる社会集団（人々の集まり）が存在する。個人はそれら社会集団に所属している限りあらゆる拘束を受ける（法律、規則、校則、社則、規範、ルール、掟、暗黙の了解など）。社会集団に所属することによって拘束はされるが自らの行動のルール（規範・道徳）はその中に生まれる。

そして個人がこれら社会集団（人々の集まり）からの所属（および所属意識）を無くしてしまうと、行動判断の規準は外部に依らなくなり自らの内で定めてしまうようになる。そしてデュルケムはこの状態を「過度の個人化」と定めた。「過度の個人化」となった者は外在的拘束力が弱くなり、少しずつ「考え・行動（＝道徳）」を制限するものが無くなっていく。これがプラス（激昂型）に働くとそれは「そとへの攻撃」＝「社会への攻撃（犯罪行為）」となって表れ、逆にマイナス（沈鬱型）に働くとそれは「うちへの攻撃」＝「自分への攻撃（自傷行為）」となっ

て表れる。犯罪行為も自傷行為も逸脱行為であり、つまり「過度の個人化」は逸脱行為を誘発しやすくなるということである。したがって犯罪行為や自傷行為という社会現象はその結果として生じてくるのである。ここから理解できる事として、個人の思考や行動、価値・規範に基準を与え、を規制・抑制・そしてコントロールしているのは、個人と社会（人々の集まり）との結びつき＝人間関係なのである。

おわりに

今回、人間関係の持つ影響力を理解するため、デュルケム社会学の考えを取り入れた。しかしなぜ100年以上も前の学者の研究を取り入れたのか、やはりこの問題は重要である。古典の読み方としては例えば、現在主義的読解と歴史主義的読解とがあげられる。現在主義的読解はその名のとおりに、現在の〈問題〉との関連で読んでいく。しかしこの立場は読み方についてこれ以上は語ってくれない。〈問題〉への答えを見つけるためなのか、〈問題〉の立て方を探すためなのか。前者だとすると古典の意義はさほど多くはない。もちろんデュルケムが解決しようとした問題、すなわち混乱しているフランス社会の基礎をいかに再建するかという問題についてはデュルケムの現代的意義があることは確かである。しかしこの場合もデュルケムが与えた解答が重要ということではない。それにデュルケムという社会学者の研究成果は、とりわけ解こうとした問題にこそあり、与えた解答にではない。

そして解答を与えることよりも問題を立てることの方がはるかに難しい。いずれにせよ現代の〈問題〉との関連で読む場合でも、その狙いは〈問題〉の立て方を学ぶためである。古典と呼ばれるほどの位置を占める社会学者ならば、その〈問題〉の立て方にとっても示唆を与えてくれるはずである。とすれば現代主義的読解と歴史主義的読解とは排他的なものではあるまい。というのはいかに〈問題〉が立てられたか知るためには、歴史のなかで読むしかないからである。いかなる歴史的状況におかれていたか、いかなる立場と対決しようとしたか、人間や社会に対していかなる思想を持っていたかなどを抜きにして、いかに〈問題〉が立てられたかなどは明らかになりえない。したがって我々から遠いがゆえに古典研究は重要であると言うことができよう。

引用・参考文献

- 11) E.デュルケム『社会分業論（上）』349頁
- 12) E.デュルケム『社会分業論（下）』77頁

- 1) Emile Durkheim., *Le suicide*, PUF.1897
(=E.デュルケム『自殺論』宮島喬訳, 中央公論社, 1985)
- 2) Emile Durkheim, *De la division du travail social*, 1893, (=E.デュルケム『社会分業論（上）』・『社会分業論（下）』井伊玄太郎訳, 講談社, 1989)
- 3) 中島道男: デュルケムの<制度>理論, 恒星社厚生閣, 1998
- 4) 中久郎: 持続と変容, ナカニシヤ出版, 1999
- 5) 中久郎: 社会学の基礎理論, 世界思想社, 1987
- 6) 夏刈康男: 社会学者の誕生ーデュルケム社会学の形成ー, 恒星社厚生閣, 1996
- 7) 宮島喬: デュルケム社会理論の研究, 東京大学出版会, 1978

脚注

- 1) 正確には「自己本位的自殺」、「集団本位的自殺」、「アノミー的自殺」、「宿命的自殺」の4つである。しかし「宿命的自殺」に関して、デュルケムは、今日ではほとんど重要性をもたず、特例以外で例を見出すことは難しいという理由から『自殺論』の本文ではなく、文末の脚注にのみ記されている。

「宿命的自殺」…過度の規制から生じる自殺で、アノミーと対極的な位置づけの自殺である。すなわち極端な物質的・精神的独裁の横暴を原因としており、デュルケムは「ある条件のもとで頻発した奴隷の自殺」を例に挙げ、不可避免的で柔軟性の乏しい性格から「宿命的自殺」と命名した。

E.デュルケム『自殺論』530頁

- 2) E.デュルケム『自殺論』174頁
- 3) E.デュルケム『自殺論』247頁
- 4) E.デュルケム『自殺論』248～249頁を要約
- 5) E.デュルケム『自殺論』257頁を要約
- 6) E.デュルケム『自殺論』297頁
- 7) E.デュルケム『自殺論』300頁
- 8) E.デュルケム『自殺論』319頁
- 9) 夏刈康男『社会学者の誕生』69～70頁を要約
- 10) E.デュルケム『社会分業論（上）』330頁